

【研究動向】

新しい資料，新しい思想？——近年の J. S. ミル研究——*

川 名 雄一郎

I はじめに

グレイが伝統的解釈と修正的解釈というふたつの潮流を対比させながら、ジョン・スチュアート・ミル研究の動向を整理したのは1979年のことであった (Gray 1979)。20世紀初頭から前半にかけての伝統的解釈では、グレイが1958年に記されたプラメナッツの以下の文章を象徴的に引用しているように、ミルの思想はあらゆる領域において時代遅れのものとされ、思想史上のエピソード以上のものとしては顧みられることがないかのような状態であった。

早老の病んだ人物によって書かれたこれら三つの論考〔『功利主義』、『自由論』、『代議政治論』〕は、彼の思想家としてのあらゆる欠点、明晰性のなさ、一貫性のなさ、父〔ジェイムズ・ミル〕とベンサムから継承した原理を心から受け入れることも拒絶することもできなかったことを示している。
(Plamenatz 1958, 123 / 訳 194)。

このような容赦のない批判が違和感をもたれなかったのが20世紀半ばまでの状況であった。

それに対して、1960年代から1970年代にかけて多く試みられるようになった修正的解釈は、このような消極的なミル評価に抗する形で、体系性と一貫性をもったものとしてミルの著作群の新しい解釈を提示することになった。この時期には、リーズ、ライアン、ブラウン、ライオンズなどによる研究が現れるとともに (Rees 1956; 1958; 1960; 1966; 1977, Ryan 1964; 1970; 1974, Brown 1972; 1973a; 1973b; 1974; 1978, Lyons 1965; 1973; 1976)、自らも1968年に重要なミル研究書を公刊したロブソンを中心としたトロント大学のミル・プロジェクトによる著作集の出版が順調に進められた (Robson 1968)¹⁾。

グレイによる整理から30年以上が経過し、グレイが修正的解釈と呼んだ潮流に棹さず研究が多く現れるとともに、新たな動向も見られるようになり、現在のミル研究は全体として活発な状

* 本稿の執筆に際しては、山本圭一郎氏（東京大学）から多くの有益なコメントをいただいた。また、編集委員会を通じて匿名の会員の方からもコメントをいただいた。それぞれ記して感謝したい。なお、本稿は科研費・若手研究 (A) (26704002) および挑戦的萌芽研究 (26580014) による研究成果の一部である。

況にあるように思われる。本稿では、20 世紀後半の動向を踏まえつつ、主に社会科学分野における近年の英語および日本語でのミル研究の動向をたどり、今後の展望を示すことを目的とした²⁾。

現在のミル研究にとって不可欠の基礎となっているのは、上述したミル・プロジェクトによって 1963 年から刊行が始まり 1991 年に完結したトロント大学版『ジョン・スチュアート・ミル著作集』(Priestley and Robson, eds. 1963-1991) である³⁾。編集方針、収集・収録された論考・書簡の範囲、厳密なテキスト・クリティーク、詳細な各版対照など、多くの点で決定版と言ってよいこの著作集によって⁴⁾、ミル研究は資料の面ではほぼ完備した状況下でおこなわれるようになっている⁵⁾。

このような資料の整備という事情とともに、今世紀初頭にミルへの関心が高まるきっかけのひとつとなったのは、2006 年が生誕 200 年というアニバーサリー・イヤーであったことであり、この時には記念の国際学会や研究セミナーなどがいくつか開催された⁶⁾。そのうち、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン (UCL) で国際功利主義学会の大会として開催されたものと横浜国立大学で開催されたものの全体講演のスピーカー (とタイトル) は、ロンドンのものは、アン・ロ

- 1) あらためて指摘するまでもなく、この時期のミル研究におけるリヴィジョンは 1960 年代以降の功利主義思想の理論的・歴史的研究の進展にも多くを負っていたものである。この時期の功利主義をめぐる状況については、児玉 (2010) を参照のこと。個別の思想家研究ではない功利主義研究の近年の日本語によるモノグラフとしては、児玉 (2010) のほか、松嶋 (2005)、安藤 (2007) が重要である。なお、英語での文献では、Eggleston and Miller, eds. (2014) が功利主義の理論と歴史について見通しを与えている。
- 2) ただし、膨大な量の文献に網羅的に言及することは不可能であり、意義のあることでもないので、本稿で取り上げる文献は分野・数ともに筆者の関心と能力にしたがって限定されている。本稿には山本・川名 (2006) の内容も適宜取り込まれており、あわせて参照いただければ幸いである。なお、『経済学史学会年報』では、杉原・福原 (1973)、馬渡 (1987; 2001) が公刊されている。また、松井 (2005) にも簡潔な整理がある。
- 3) 本稿でのミルの引用は、すべてこの著作集からおこない、略記 CW と併せて巻数とページ数のみを記す (例: CW X, 1 = 著作集第 10 巻 1 頁)。

本著作集には、ミルの東インド会社での業務に関連する文書や、長く趣味としていた植物学関係の資料は収録されていない。また、著作集完結後も、著作集未収録の資料の整理・公刊が進められており、直近では Inoue, ed. (2014) のような刊行物がある。なお、現在ではアメリカ合衆国の非営利団体 Liberty Fund が運営するウェブサイト Online Library of Liberty において、本著作集の PDF 版および HTML 版が無償で公開されている (<http://oll.libertyfund.org/> [2014 年 8 月 1 日最終確認]。ただし、著作集全体への索引である第 33 巻は除かれている)。

また、ミル研究に深く関係するジェレミー・ベンサムやジェイムズ・ミルの資料の整備も進んでいる。ベンサムについては、UCL のベンサム・プロジェクトによる新版著作集の刊行が進んでおり、ジェイムズ・ミルについては、ロンドン図書館所蔵の未公開ノート類をロバート・フェンが生前に転写・整理していたものがオンラインで公開されている (<http://intellectualhistory.net/mill/> [2014 年 8 月 1 日最終確認]。これとは別に一部が LSE 図書館に所蔵されている)。なお、ベンサム研究については、Crimmins (1996) や高島・小畑・板井 (2014) によって近年の動向を知ることができる。

- 4) ロブソン自身による編集方針などの説明については、Robson (1967; 1981) を参照のこと。

ブソン ('A "Crisis" in Fashion'), ジョン・スコラプスキ ('Liberalism as Free Thought'), ジョナサン・ライリー ('Justice as Higher Pleasure'), ジェイムズ・グリフィン ('What Sort of Liberty should We have?'), ロス・ハリソン ('Making Free with Liberty'), ブルース・キンザー ('The Primacy of the Political and the Problem of Cultural Authority in an Age of Transition'), ドナルド・ウィンチ ('Wild Natural Beauty and the Religion of Humanity: Mill's Credentials as a "Green" Thinker'), ピーター・シンガー ('Mill's Relevance: A Personal View'), ウエンディ・ドナー ('John Stuart Mill and Virtue Ethics and Politics'), マーサ・ヌスバウム ('Mill's Feminism: Liberal, Radical, and Queer') であり⁷⁾, 横浜のものは, フレデリック・ローゼン ('The Method of Reform: J. S. Mill's Encounter with Bentham and Coleridge'), デイヴィッド・ウェインステイン ('The "Strange Tangles" of Mill's "Moral Almanack"'), スコラプスキ ('Liberalism as Free Thought'), ゲオルギオス・ヴァローカキス ('Between Patriotism and Cosmopolitanism: Mill on Nationality Revisited'), ライリー ('Mill, Ancient Athens, and Liberal Democracy') である. ここではそれぞれの内容を紹介することはできないが, スピーカーの顔ぶれは 2000 年代の (ミルを含めた) 功利主義研究の関心がどのようなものかを窺う手がかりとなっているだろう.

-
- 5) ミルの論文・著作についてはこれまでの多くの翻訳が公刊されてきていたが, 近年も相次いで出版されている. 一般読者 (非研究者) を主な読み手として想定し, 思い切った意識などの工夫を試みているのが, 近年のミル一次文献の翻訳の一傾向といえそうである.

『自由論』については, 山岡訳 (2011) および齊藤訳 (2012) が出版されている (なお, 山岡訳 (2011) は山岡訳 (2006) の改訳版である). 『自伝』については, トロント大学版著作集を底本とし訳者の長年のミル研究の成果を取り込んだ詳細な訳注を付した山下訳が 2003 年に, 2008 年には村井訳 (2008) が, それぞれ出版されている. 功利主義に関する論考をまとめた川名・山本訳 (2010) は, 『功利主義』などの新訳のほか, ミルの功利主義論の発展を考える上で重要でありながらこれまで邦訳のなかった「ヒューウェルの道徳哲学」も収録している. 教育論である『セント・アンドリュース大学学長就任講演』の竹内一誠による邦訳が長らく絶版であったが, 竹内洋の解説を付して岩波文庫版として再刊された (竹内訳 2011). 宗教論では, 『宗教三論』の新訳が読みやすい訳文によって公刊された (大久保訳 2011).

なお, 筆者も訳者の一人として, トロント大学版著作集を底本として『論理学体系』の新訳の準備が進められている. 『経済学原理』については, 岩波文庫版, 春秋社版ともに絶版のため入手困難であるが, そもそも訳文が読みにくく, トロント大学版を底本としたり, 日本のミル経済学研究の高い水準を反映した訳注などを付したりした新訳が出版されれば, 日本の人文社会科学研究にとって重要な貢献となるだろう. さらに, 大部の著作のうちでは『ウィリアム・ハミルトン卿の哲学の検討』について翻訳が待ち望まれる.

- 6) さらに, 2009 年の『自由論』出版 150 周年の際にも, 筆者が知るかぎりでも, いくつかシンポジウム等が開かれていたが, 『自由論』と同じ年に出版されたダーウィン『種の起源』への関心の影に隠れてしまった感があった.
- 7) なお, UCL での学会については, 全体講演の一部とセッションでの報告のいくつかを収録した Varouxakis and Kelly, eds. (2010) が刊行されている.

II 功利主義——形態と幸福観——

研究の進展にともなう、社会の幸福の最大化を究極的目的とする理論としての功利主義に対する理解はきわめて細分化し複雑なものとなっており、それに歩を合わせる形でミルの功利主義論に対する理解も深められながら多様なものとなっている。以下では、功利主義の形態および幸福観について、まず功利主義研究全体の状況を簡単に述べてから、ミルの議論についてみていくことにしたい。

1. 功利主義の形態

功利主義の形態、すなわち功利性をどのように評価するかという問題については、(1) 行為功利主義 (act utilitarianism) と規則功利主義 (rule utilitarianism)、(2) 直接功利主義 (direct utilitarianism) と間接功利主義 (indirect utilitarianism) などの分類がなされ、これらの組み合わせによってさまざまなタイプの功利主義が描き出されることになる⁸⁾。簡単に確認しておく、行為功利主義が個々の行為の帰結を功利計算の対象とする立場であるのに対して、規則功利主義は行為功利主義の難点を克服するものとして現れた、個々の行為ではなく規則を評価の対象とする立場である。そして、直接功利主義は、何が対象であるかは別にしても、行為に際して功利性をつねに考慮しながら行為すべきだとする見解であり⁹⁾、間接功利主義は、功利性を考慮しながら行為することを必ずしも要求しない見解である。これらのうちどの要素をどの程度までミルの議論に読み込み、どのようなタイプの功利主義者としてミルを理解するかについて研究者の間で意見の一致があるわけではない。

ミルの功利主義論についての伝統的解釈というべきものは行為功利主義的解釈である。これについては、クリスピの解釈が近年の代表的議論である (Crisp 1997)。ただし、ミル功利主義論の入門書としても評価の高い同書においてクリスピが提示しているのは、意思決定をつねに功利性の原理を参照することによっておこなう単一レベルの行為功利主義によるミル解釈ではなく、功利主義の評価の対象については行為功利主義、行為者の意思決定については間接功利主義であり、功利性の原理以外の複数の原理が対立した時に功利性の原理を参照する多層レベルの功利主義というミル解釈である (105-12)。

ミルに規則功利主義的な考え方があることを最初に指摘したのはアームソン (Urmson 1953)

8) このふたつは同じ区別を別の名称で呼んでいるものにすぎないという説明、すなわち行為功利主義=直接功利主義、規則功利主義=間接功利主義とする説明がしばしばみられるが、これは正確ではない。なお、児玉 (2010, 137-38) によれば、規則功利主義という命名がなされたのは 1959 年であるが、その考え方の基礎を築いたのはハロッドである。

9) すなわち、直接功利主義であっても、行為功利主義は行為の帰結の功利性を考慮しながら行為し、規則功利主義は規則の功利性を考慮して行為することになる。

であり、それ以降、規則功利主義的ミル解釈は盛んに論じられることになった¹⁰⁾。規則功利主義的ミル解釈の立場に立っているのは、細部には異同があるが、ライオンズ、ライリーやミラーなどである (Lyons 1994; Riley 1998; Miller 2010)。また、間接功利主義的ミル解釈は、グレイ (Gray 1983) によって、『論理学体系』における「生の技法 (Art of Life)」という概念を踏まえた上で提示されたものである。ただし、この解釈は、発表当初に比べれば、勢いを失いつつあるように思われる。

ミルの『功利主義』における議論については、第2章「功利主義とは何か」における行為功利主義的な議論と第5章「正義と功利性の関係について」における規則功利主義的な議論のいずれを重視するかによって解釈に違いがでてくることになる。近年ではウエスト (West 2004; 2014) やショウ (Shaw 2014) のように、ミルは両方の立場をそれぞれの状況によって使い分けており、このような区分による解釈はミルに馴染まないとする研究者も多い。さらに、ブリנקは行為功利主義/規則功利主義という二分法の有効性に疑問を付し、「サンクション功利主義」と呼ぶミル解釈を打ち出している。これは、行為の善悪を、その功利性によってではなく、それに対してサンクションを適用することの功利性によって定義する、間接功利主義的な形式の功利主義である (Brink 2013; 2014)。

2. 幸福観

幸福を唯一の望ましい目的とみなす福利主義 (welfarism) の立場に功利主義が立っている以上¹¹⁾、幸福という概念自体をめぐる議論も避けては通れない。この点については、快楽説 (hedonism)、欲求充足説 (desire satisfaction theory)、客観的リスト説 (objective list theory) という3つの立場が主要なものとして挙げられるのが一般的である (Parfit 1984, Griffin 1986)¹²⁾。現在ではさらに細分化が進んでいるが、ここではとりあえずこの分類にしたがって簡単に確認しておこう。

快楽説は、19世紀以来広く受け入れられてきた、そして近年ふたたび再評価の動きが見られる見解であり、快い心的状態を幸福の構成要素とみなす見解である。すなわち、快楽や苦痛という主観的経験を評価の基準とし、快楽が多く苦痛が少ないほど幸福な状態にあるとみなすのである。それに対して、欲求充足説は、快楽説のように心的状態だけに着目するのではなく、欲求 (心

10) 19世紀前半の古典的功利主義については行為功利主義として解釈すべき立場が一般的であるが、ジョン・オースティンのようにはっきりと規則功利主義的な見解を示していた思想家もいる。川名 (2006) では、このオースティンの功利主義論をミルの規則功利主義的発想の重要な源泉のひとつとして検討している。

11) 福利主義は、サムナーの表現を借りれば、「倫理理論が究極的に、しかもそれ自体のために真剣にとらえる必要のある価値は、福利に尽きるという見解」(Sumner 1996, 3) である。ただし、この立場をとらない功利主義もある。

12) いうまでもなく、これらの幸福観の理論としての優劣と、どの理論によってミルの議論がもっともうまく解釈できるかは別の問題である。

的状态)の対象となる客観的事態の成立をもって福利になるとみなす、いわば主観説と客観説のハイブリッドな立場である。この欲求充足説は、1970年代半ばから1980年代にかけて大きな注目を集めることになった見解であり、それにはいくつかの理由が考えられる。ひとつは、ロビンズやサミュエルソンに代表される、快樂説批判の立場からの顕示選好への着目という経済学における行動主義的な流れである。別の理由として重要なのは、ノージック(Nozick 1974)による有名な「経験機械」の思考実験の議論による快樂説批判を契機とした、快樂説の弱体化である。人が望めばどのような経験でも与えてくれる機械につながれ(そして、その人はこの機械につながれていることを知らずに、その経験が現実に行っていると考えている)、その機械がもたらす経験を通じて快樂を感じるような状況があるとしたら、快い心的状態を幸福とみなす快樂説の支持者はこの機械の使用を奨励することになるが、実際には私たちはこのような機械につながれて生きることを望まないだろう。これがノージックの経験機械の議論の概要である。この快樂説批判は、発表当時大きな影響をもち、多くの功利主義者は一元論的な快樂説から多元的な議論へと軸足を移していき、欲求充足説は快樂説に代わるものとして支持されるようになった。しかし、行為者本人が実際に欲求充足(客観的事態の成立)を経験する必要があるかどうかという経験要件の問題、さらには適応的選好形成や外的選好の問題など、欲求充足説にも難点が多く、現在ではこの立場をとる研究者は必ずしも多くはない。

快樂説と欲求充足説が主観説として括られるのが一般的であるのに対して¹³⁾、客観説である客観的リスト説は、快樂や欲求という主観的要素に関係なく、幸福の構成要素となる客観的な善が存在していると考えた立場である。パーフィットが名付けたこの客観的リスト説には、さまざまなヴァリエーションがあり、現代の著名な自然法論者であるフィニスによる7つの基本的善(健康、知識、遊び、美的経験、友情、実践的理性、宗教)というアイデアがよく知られているほか、センの「ケイパビリティ・アプローチ」を踏まえたヌスバウムのような、アリストテレス的卓越主義あるいはエウダイモニズムの立場もある。なお、卓越主義的な見解にも、いわば欲求充足説と客観的リスト説とのハイブリッド型で、リストアップされた項目の個々について必ずしも絶対性を要求することなく、客観的リストの項目からの主観的選択の余地を認めるグリフィンのような立場もある一方で、プリンクのようにさまざまな価値を快樂や欲求に還元することなく、客観的にとらえようとする「客観的功利主義」の立場もある。

ミル功利主義論に関して言えば、ミルは快樂説を採用しているというのが伝統的解釈であった。そして、近年の代表的な快樂説的ミル解釈は、クリスピー(Crisp 1997)やウエスト(West 2004; 2014)などである。「完全な快樂説」は、クリスピーによれば、幸福が快い経験に存しているとい

13) 主観説としての快樂説の難点を乗り越えようとした欲求充足説は、主観説と客観説のハイブリッド型とも言えるが、欲求の対象となるのは外的世界の客観的事態であるのに対して、当該の客観的事態の成立を価値あるものとしているのは主体の欲求という主観的要素にほかならないので、一般的には主観説に分類される。

う実質的要素と、これらの経験がその人にとって良いものなのはそれらが快いことであるからだという説明的要素からなっている (Crisp 1997, 26). ミルは『功利主義』のなかで、「幸福とは快樂、ならびに苦痛の欠如を意味し、不幸とは苦痛、ならびに快樂の不在を意味する」とか「快樂、および苦痛の欠如が目的として望ましい唯一のものである」とはっきり述べて上述の実質的要素を示しているし、「すべての望ましいものは、それに含まれる快樂のために、あるいは快樂を増し苦痛を防ぐ手段として望ましい」と述べていることから説明的要素ももっているということになる (*Utilitarianism*, CW, X, 210). その上で、クリスは、ミルが快樂 (pleasure) と愉樂 (enjoyment) を互換的に使用していることを根拠にして、ミルの議論を愉樂理論として特徴づけている (Crisp 1997, 27-28)¹⁴⁾.

このように、一見すると快樂説というミル解釈にはテキスト上の強い根拠があるように思われるが、他方で、彼の議論には（とりわけベンサムの快樂主義的人間観に対する批判のように）快樂説以外の見解を採用しているように思われる箇所もあって、彼の幸福観をどうみるかはいまだに議論の多い論点である。

快樂説以外の解釈のうち、欲求充足説によるミル解釈としては内井 (1988) や Berlin (1991) が挙げられる。また、ドナー (Donner 1991) のようにこの説を快樂説と折衷的に採用する研究者もいる。欲求充足説のテキスト上の根拠とされるのは、『功利主義』における、ふたつの快樂の間での優劣を決めるのは両方の快樂を経験した人の選好であると述べている箇所であって、ここではそのような人の選好ないし欲求の充足を満たすものが幸福であるという議論がなされていると解釈される。さらには、ミルはあるものを欲することと快いとみなすことは同一の心理現象であると論じており、この考え方も欲求充足説の根拠のひとつとされる。しかし、欲求充足説の根拠として挙げられる言明は、テキスト全体の文脈に照らせば快樂説の枠内で解釈できるものであり、快樂説を批判して欲求充足説を採用するための根拠として十分とはいえないものである。

客観的リスト説によるミル解釈の根拠として挙げられるのは、『功利主義』における有名な快樂の質的差異の議論や高級な快樂を選択するのは尊厳の感情によるという議論のほか、幸福の構成要素として快樂以外の具体的な項目をミルが列挙しているという事実などである。ただし、客観的リスト説についても、欲求充足説の場合と同じように、ミルのテキストにある言明は根拠とするには必ずしも十分なものとはいえない。

客観的リスト説によるミル解釈については、グレイ (Gray 1983) やバーガー (Berger 1984) などもおこなっているが、ここではブリンクの議論をとりあげておきたい (Brink 1992; 2013; 2014). ブリンクは、快樂説解釈を放棄し、ミルの議論にみられる不整合を解消するべく、次のようなミル解釈を提示している。ミルは人間を他の動物から区別するような高次の能力を行使す

14) ただし、愉樂は快樂とまったく同義ではない。クリスの登山の例では、山頂にたどり着くことによって得られる最終的な快樂のために山に登るといふ苦痛を甘受することが愉樂ということになる (Crisp 1997, 27-28)

ることに幸福を見出しており、人間を進歩する存在としてみなしている。また、このような高次の能力の行使は客観的に善いものであると考えている。高次の能力を行使するという行為自体が高次の快楽であり、この高次の快楽は低次の快楽に絶対的に優越するものであり、そこでは量による比較はなされえない。したがって、自由は本質的な善ではないが、高次の能力の行使のための必要条件であり、そのような観点から擁護されるべき権利であるとされる。ブリנקはこのような解釈から、ミルの立場を客観的リスト説的な卓越主義としてまとめた上で、次のように述べている。

…ミルの高級な快楽の理論は卓越主義の用語によってもっともうまく解釈されるし、彼の功利主義の見解のもっとも特徴的で進歩的な側面のいくつかを説明するのは、この卓越主義的な幸福理解である。
(Brink 2013, 279)

また、客観説のうち、現在大きな影響をもつようになっている、快楽という心的状態ではなく活動やあり方が実現されることを幸福とみなすエウダイモニズムをミルに見出す解釈として、ヌスバウムの議論にも言及しておきたい (Nussbaum 2004)。ヌスバウムは、「精神の危機」後のミルが、それ以前から信奉していた快楽主義的幸福観を維持しながら、新たにエウダイモニズムの幸福観を採用したとして、ミルの思想におけるこれらふたつの幸福観の併存を指摘している¹⁵⁾。

ここまでミルの功利主義論についてのさまざまな解釈を見てきたが、ミル自身の言明はこのような現代的な分類をあてはめるにはしばしば曖昧にすぎるために、これらの分類に基づくミル功利主義論の解釈について決定的なものが提示されることを期待するのは難しいかもしれない。それでも、それぞれの解釈はそれぞれの仕方でもミルの議論の特徴をとらえており、ミル解釈として魅力的なものを含み、ミル研究の深化を象徴しているように思われる¹⁶⁾。

III 『論理学体系』と科学方法論

16歳の時に著述活動を開始したミルが37歳の時に出版した最初の著作であった『論理学体系』(1843年)は、ミル自身が『自由論』とともに後世にもっとも長くのこっていただろうと自負した著作であった (Autobiography, CW, I, 259)。同書には生煮えのものも含めてミルの思索の成果がほとんどすべてと言ってよいほど詰め込まれており、ミル研究者にとってもアイデアの貯蔵庫であり尽きることのない着想の源泉である。

20世紀前半には、哲学者としてのミルに対する評価、そしてその主著である『論理学体系』

15) 小田川 (2014) はこのヌスバウムの議論を手がかりに、ミルの政治哲学の重層性を検討している。

16) なお、本稿の脱稿直前に水野 (2014) が出版された。水野は、幸福をめぐるミルの議論を丁寧にたどったうえで、「快楽」を快い意識状態だけでなく、それと観念連合によって結びついたさまざまなものを含むものとして理解することによって、快楽主義を基本としながら客観的リスト説の主張も取り込んだ「拡張された快楽主義」としてミルの議論を解釈している。

に対する評価はけっして芳しいものではなかったが（山本・川名 2006, 126）、1970年代以降の修正的解釈によるミル研究の進展を経た近年では状況は様変わりしており、この『論理学体系』への関心の高まりを最近のミル研究における注目すべき傾向のひとつとして指摘することができるだろう。

とはいえ、人文社会科学のほぼすべての領域にわたる膨大なトピックを扱っている『論理学体系』の包括的で詳細な検討はようやく緒に就いたばかりの段階であり、全体像が解明され、この著作がミルの思想体系のなかでもっている意義が明らかになるまでには今しばらく時間がかかるだろう。『論理学体系』の理解のために（とくに経済思想史分野の研究者にとって）今後の研究において重要となるのは、第5篇までの議論を詳細に分析しないままに第6篇「道徳科学の論理」に関心を過度に集中させ、第6篇の議論を他の論考に関連づけてしまうことなく、まずは『論理学体系』という単一の著作の中で全体を通じて何が論じられているのかを正確に検討することである。そのためには、たとえば言語哲学や科学哲学（とりわけ自然科学について）など、ミルの時代と学問の様相が大きく変わってしまっているために、歴史的な興味以上にはミルを本格的な研究対象とすることの少ない分野の研究者をミル研究に取り込み、協力しながら研究を進めていくことが必要となるだろう。さらに、これまで研究蓄積のほとんどない『ウィリアム・ハミルトン卿の哲学の検討』との関連を視野に入れて研究を進めていくことも重要になるだろう。以下では、このような状況を踏まえた上で、『論理学体系』および関連するトピックに関する研究を確認しておこう。

たとえば Scarre (1989) や Skorupski (1989) のように、『論理学体系』（および『ウィリアム・ハミルトン卿の哲学の検討』）における議論を詳細な検討の対象とした研究や、Skorupski, ed. (1998) のように『論理学体系』の理解のために重要な議論を提供している研究はあるものの、これまで『論理学体系』を直接的に対象とした研究は、形成史的な Kubitz (1932) や矢島 (1993) があるくらいであった。しかし、最近になって Loizides, ed. (2014) が公刊された。

『論理学体系』での議論のうち、第6篇で述べられている「生の技法」は、ライアンによってその重要性が指摘されて以来（Ryan 1970. Cf. Ryan 2014）、ミルの思索を統一的に理解する要になりうる概念として注目されたが、本格的な検討は手つかずのままであった。Eggleston, Miller, and Weinstein, eds. (2011) は、さまざまな分野の研究者が集って、この概念について論じ、またこの概念を手がかりとすることでミルの思想を読み解いていこうとする試みである。ただし、同書は「生の技法」自体の研究というよりは、その概念を意識しつつ、ミルの主要著作を解釈しようとする志向が強く、その意味では『ジョン・スチュアート・ミルと生の技法』というタイトルから受ける印象ほど「生の技法」に焦点があてられているわけではない。それでも、それぞれの著者の得意とするトピックをこの「生の技法」と関連づけて読み解こうとする個々の議論は興味深く、示唆に富む論文集である。

なお、日本でもこの「生の技法」は関心を集めてきているが、やはり主な関心は、この概念を基軸にミルのさまざまな著作をいかに読み解くかという点に向けられがちであった。しかし、こ

の概念をまずは『論理学体系』の中で読み解こうという岡本（2011）や、倫理学の立場からの方法論の研究としての山本（2012）などが公刊されており、今後はこのような方向性の研究も進んでいくだろう。

科学方法論というトピックについては、シュナイダー（Snyder 2006）が幅広い射程の議論によって重要な示唆を与えてくれている。シュナイダーは、さまざまなトピックについてウィリアム・ヒューウェルとミルを対峙させ、科学や社会をめぐる両者の議論を比較しながら、それぞれの議論の特質を描き出している。なお、社会科学方法論に関して、筆者は川名（2012）において、Collini（1980）や Collini, Winch, and Burrow（1983）から初発の示唆を受けながら、ミルの「社会の科学」構想について、その枠組や方法論を検討している。

IV 経済理論・経済思想

この分野については、20 世紀後半に、リカードとの連続性を強調する「連続説」を強力に打ち出しながら、統一的なミル経済学を描き出した Hollander（1985）と、ホランダールの時に強引なテキスト読解を丁寧批判しつつ、代替的解釈を提示した馬渡（1997）という、いずれも大部の研究が公刊されたあと¹⁷⁾、馬渡（2001, 42）で述べられているように、「現在は、J・S・ミルに関する経済学史的研究の大きな動きは止まっているようにさえ見える」感もあるが、それでも個別のトピックについて研究成果が現れ続けており、このことは特に日本語での研究について言える。日本のミル研究は 2009 年には杉原四郎を、2013 年には馬渡尚憲を喪ったが、この二人が牽引してきた日本の経済学史・経済思想史分野におけるミル研究は、これまでの成果を基礎に今後重要な成果が期待できるだろう¹⁸⁾。

馬渡（2001, 44-47）はミル経済学研究の今後の課題について、1. 方法論ないし科学論、2. 経済理論、3. 政府・経済政策論、4. イギリス功利主義思想の研究に分類して述べているので、ここでもこの分類にしたがって近年の研究に言及しておこう（ただし、4 については、本稿の別の箇所でも述べられていることと重なるので除く）。

1. 方法論ないし科学論

経済学（や広く社会科学）の方法論に対する持続的な関心が日本の経済思想史分野におけるミル研究におけるひとつの特徴とってよいように思われる。ミルの経済学方法論については、日本語でも国際的にみても高い水準の研究がこれまで多くなされてきており、今後はこの成果を国際的に発信していくことが課題となるだろう。近年ではとりわけ、「演繹と帰納」という視角からミルを含めた 19 世紀の経済学方法論について詳細な見取り図を提示している佐々木の一連の

17) ホランダールのこれまでのミル研究については、Hollander（2000）としてまとめられている。

18) 経済学にとどまらない広い射程をもった杉原のミル研究は、杉原（2003）としてまとめられている。

研究（佐々木 2001; 2010; 2013）や松井（2010）などがある。

2. 経済理論

ミルの経済理論については、近年は諸泉による研究が積み重ねられているほか（諸泉 1997a; 1997b; 2003; 2014）、相互需要説に関する藤本の一連の研究（藤本 1995; 1997; 2001; 2005）もあり、理論の内在的分析とともに、同時代の別の経済学者との比較や当時のコンテキストでの位置づけをさぐる研究が多くなされている。

3. 政府・経済政策論

この分野のなかで財政論を例にとると、堂目による研究（堂目 1999, Dome 1999; 2004）をはじめとして多くの蓄積があるが、近年では、小沢（2014b）が、ミルの歳出論のなかでも軍事費をめぐる議論に関心を向け、ミルが戦争抑止力と戦争遂行能力の観点から検討していたイギリスの軍事費削減策について考察している。

なお、小沢は『経済学原理』をメインに、広範な資料を利用しながら、ミルの経済思想について興味深い再検討を進めている。『経済学原理』の各版対照という作業にもとづいて、小沢（2013）では静止状態論の変遷を、小沢（2014a）では幼稚産業育成のための保護関税をめぐる議論の変遷をそれぞれたどり、その意義をあらためて確認しつつ、ミルの議論を当時の文脈において読み解く作業をおこなっている。

上記以外の経済思想に関連する分野でも多くの成果があり、松井（2005）のほか、直近でも、「高賃金の経済学」という視角からマルサス、ミル、マーシャルをとりあげた柳田・近藤・諸泉編（2013）や、文芸や宗教まで視野に入れてミルを取り巻いていたヴィクトリア時代の思潮を分析した有江編（2013）などがある。

V 政治・社会思想

1. 自由論, 正義論, 性格論

これまでミルの政治思想研究といえば、『自由論』（およびそれとの関係で、『功利主義』や『代議政治論』）が主役であり、主要な関心は自由や自由主義をめぐる問題に向けられ、古典的リベラルの代表者としてのミル像が彫琢されてきた。かつては『功利主義』と『自由論』の関係、すなわち功利性の原理と自由の原理の関係が問題にされるが多かったが、あくまでも功利性の原理を究極的な第一原理とし、『自由論』での議論をその系とみなす解釈、すなわちミルの自由擁護論に功利主義的基礎を見出す解釈が主流になってきている。

とはいえ、ミルの自由主義が功利主義と矛盾なく両立しうるものなのかは、依然として議論の多い問題であり続けている。たとえば、ミルの自由原理を非功利主義的に解釈するテン（Ten 1991）や、質的快樂説と卓越主義のつながりを指摘して非自由主義的な姿勢を強調するハンバー

ガー (Hamburger 1999) などの議論がある一方で、快樂の質的差異をその量における「無限の差」とみなす快樂説と規則功利主義によるライリー (Riley 1998) のミル解釈は、これらの議論に対する反論を提示している。

ミルの自由主義の内実については、それを全体主義的・権威主義的な思想とみなす Cowling (1963) のような極端な見解は今では退けられ、単純なラベリングに満足することなく、その複雑さ・多様さへの理解が深まってきているといえるだろう。研究文献は枚挙にいとまがないが、いくつか例をあげておくと、Skorupski (2006) は、思想の自由を擁護するミルの議論をロールズの言う「包括的リベラリズム」として捉え、そこにミルの思想の現代的意義を見出す魅力的な議論を提示しているし、Ten, ed. (2010) は、『自由論』の内在的分析とともに、現代政治哲学における様々な理論や領域 (政治的リベラリズム、共和主義、多文化主義、応用倫理学) との比較を通じて、ミルの自由論の特質を検討している。さらに直近では、Claeys (2013) が、自由とパターンリズムという、ミル研究にとってけっして色褪せることのないテーマを論じている。

この分野ではミルの正義論への関心のあらたな高まりも最近の傾向のひとつとして指摘できるだろう。もちろん、これまでも正義の観念についてのミルの議論への関心は高いものがあつたが、その関心は、主に『功利主義』第5章の議論に向けられ、功利性の原理と正義の観念の両立可能性の問題などに向けられてきた。しかし、このような問題への継続的な関心に加えて、近年では、政治哲学における正義論への関心の高まりにともなって、ミルの (政治的・社会的) 正義についての議論を再構成し、ロールズやセンなどの現代の政治・社会哲学者による (ミル) 功利主義批判に対して正面から向き合おうとする研究が増えてきている。たとえば、Kahn, ed. (2012) は、ミルの正義論についての初めての論集であり、正義を含むさまざまな道徳的概念についての議論とともに、ミルと現代哲学者の正義論の比較を試み、ミルの正義論の現代的意義をさぐっている。また、Su (2013) はミルの正義に関する議論を再構成したうえで、その議論をロールズ、セン、ハイエクの議論と比較検討しつつ、彼らによるミル功利主義批判への応答を試みている。

また、新版『ジェレミー・ベンサム著作集』の編集・刊行を担っているベンサム・プロジェクトの中心的研究者として、長年にわたってベンサム研究を牽引してきたローゼンが近年集中的に進めていたミル研究の成果が Rosen (2012) としてまとめられている。かつてケリーはベンサム研究の成果がミル研究に反映されていないという不満をもちたことがあつたが (Kelly 1987, 57)、本書はそのような状況が現在では変わりつつあることを象徴しているように思われる。

ローゼンは『論理学体系』と『経済学原理』を中心としつつ、これらの著作が執筆・出版された時期にミルが交流を深めていたコントとの往復書簡を補助線とすることによって、またジェレミー・ベンサム、ジェイムズ・ミル、ジョージ・ベンサム (ジェレミーの弟サミュエルの子)、アレクサンダー・ベインといったミルを取り巻いていた思想家への広範な (これまでの研究とは異なった視角からの) 目配りによって、ミルの政治思想全体の大胆な再構成を試みている。

ただし、ローゼンの試みの成否については疑問が残る。たとえば、ローゼンはエソロジー (性格学、性格形成の科学) というミルによる未完の科学構想に着目し、彼は最終的にはエソロジー

の確立に失敗しており、晩年の著作はこの構想とは直接的な関係はないという標準的理解に対し、『自伝』、『自由論』、『女性の隷従』、『代議政治論』などをエソロジーのケース・スタディーとして読むボール (Ball 2000) の解釈を踏まえつつ、晩年に書かれた多くの著作においてもエソロジーが重要な役割を担っていたと解釈している (Rosen 2012, 86)。しかし、エソロジーに関する限り、ボールやローゼンの解釈はテキストに積極的根拠をもたない過剰な読み込みであろう。筆者もミルの思索におけるこの科学構想の重要性に着目し、川名 (2012) のなかでその位置づけを探ったが、カーライル (Carlisle 1991)、ボールおよびローゼンのような見解は、テキスト上の根拠が薄いと言わざるを得ないものであって、カパルディやコリーニが論じていたように (Capaldi 1973, Collini, Winch, and Burrow 1983, ch. 4)、エソロジーに対するミル自身の晩年に至るまでの意欲にもかかわらず、ミルが最終的にエソロジーという科学を確立することができなかったという事実の重要性を看過するべきでないと考えている。

それでも、このエソロジー構想は、ミル研究にとって躓きの石になりかねないものの、魅力的な議論であることは間違いなく、今後も思想体系のなかでの位置づけをめぐる議論が進んでいくだろう¹⁹⁾。

ミルの政治・社会思想研究については、このような問題群への持続的な関心とともに、以下で見られるように、民主主義・民主制度論や国際思想などの分野でもミルへの関心が高まってきているのが近年の傾向である。たとえば、ミル生誕 200 周年を記念した論文集である Urbinati and Zakaras, eds. (2007) や、2011 年にキプロスで開かれた研究集会から発展した論文集である Demetriou and Loizides, eds. (2013) は、そのような傾向を反映した構成になっている。また、下條 (2013) も、幅広いトピックを扱いながら、この傾向を反映した研究となっている。

2. 民主主義論と古典古代論

ミルの民主主義論については、政治理論・思想史研究における大きな潮流を反映する形で検討されてきた。古くは参加民主主義の観点からミルの代議政治論を取り上げた Thompson (1976) による研究が知られているが、1980 年代以降、Semmel (1984)、Justman (1991)、Miller (2000) などに代表される共和主義的な関心からの研究や²⁰⁾、Baum (2000) や Urbinati (2002) による熟議の民主主義の観点からの研究が試みられている。

このなかでは、たとえば、Urbinati (2002) は、それまでしばしば見られたエリート主義的な傾向をもつ古典的自由主義者としてではなく、熟議の民主主義論者としてミルを描きだしている。また、ミルの自由論について、「服従からの自由」という概念を提示しているが、これはスキナー (Skinner 1997; 2002) やペティット (Petit 1997) が共和主義思想史研究において、消極的自由と

19) この構想に関する筆者の見解については、川名 (2012) を参照のこと。

20) ベンサムを中心とした古典的功利主義における共和主義的側面を強調するケリーの試みもある (ケリー 1999; Kelly 2001)。

積極的自由というバーリンの二分法では説明しきれない第3の自由概念として提唱したネオ・ローマ的自由に近似的なものとされている。

このような研究と関連するが、かつてヒンメルファーブ (Himmelfarb 1974) が指摘した、『自由論』のミルと「もう一人の」ミルという「二人のミル」問題が、「リベラルなミル」と「シヴィックなミル」の混在の問題として装いをあらたに議論されるようになっていく。この問題については、Justman (1991) のように二つの要素を対立的にみなす見解がある一方で、Miller (2000) や小田川 (2003) は整合的な解釈を試みている。

ところで、熟議の民主主義の観点からのミル研究に対する重要な貢献である Urbinati (2002) は、近年関心を集め議論されている古典古代に関するミルの見解というトピックを論じた嚆矢としても重要な意義をもっている。「アテネのポリスから代議政治へ」という副題をもつ本書は、「現代民主主義理論へのミルの貢献を理解するための鍵」(Urbinati 2002, 2) としての古典古代へのミルの眼差しに着目し、古代アテネの(文化や風土ではなく)政治制度を肯定的に評価し、その知見を自らの政治思想に積極的に取り入れた思想家としてミルを描き出した。アービネイティによれば、有権者に対する代表者の責任と自律という、直接民主主義には原理的には存在しない、代表(間接)民主主義に固有の問題を、熟議という観点から解決しようとしたミルにとって、古代アテネの直接民主主義と近代の間接民主主義はいずれも熟議という観点から連続的に捉えられるものであり、ミルの代表制論は古代アテネの政治制度から多くを学んだものであった。このように同書はミルの政治思想・民主主義論に古典古代論という視角を導入するという重要な議論を展開しているが、ミルの古典古代論への着目にもかかわらず、その強すぎる現代的関心ゆえに、ミルの古典古代論の同時代的文脈への位置づけについては不十分であった。

アービネイティの著作に続いて、ミルと古代ギリシア論を取り上げる論考がいくつかみられたが (Devigne 2006, Riley 2007 など)、もっともまとまった議論を提示しているのが Loizides (2013) である。同書は、アービネイティ以降のこのトピックに関する研究の進展を踏まえつつ、ミルの古代ギリシア哲学の受容を19世紀イギリスの文脈の中で読み解こうという試みである。おそらくは父ジェイムズ・ミルの影響によって、ミルはきわめて早い段階からプラトンの著作に親しんでおり、プラトンの対話篇のいくつかの翻訳や解説を雑誌に発表するなどしていたが、ミルの古代ギリシア哲学との関わりをまとめて論じる研究はこれまではほとんどなかった。本書では、最初に古典古代の哲学をめぐる19世紀前半(ジョージ・グロートらの著作によって古代ギリシア哲学への関心が高まる以前)のブリテンの知的コンテクストが論じられるが、そこではベンサム主義的功利主義の幸福観に「プラトンの」観念を取り入れた思想家としてのジェイムズ・ミルが描き出されている。その上でミルのプラトン読解が論じられ、またミルの道徳哲学における性格形成や自己発展の重要性が指摘され、ミルの徳倫理的な思考へのプラトンの議論の影響が指摘されている。

ミルの古典古代論については、ミルの議論の内在的分析とともに、ジェイムズ・ミルやジョージ・グロートといった、ミルの身近で古典古代に関心をもっていた思想家との比較分析を進める

ことによって、さらなる成果が期待できるだろう²¹⁾。

VI 国際政治・国際関係思想

1. 不 干 渉 論

近年の国際政治理論・思想研究の活況にともなって²²⁾、1990年代以降、国際関係、ナショナリティ、帝国といった問題群がミル研究においても大きな位置を占めるようになり、この分野では多くの成果が現れている²³⁾。

まずはミルの内政干渉・不干渉論に触れておくことにしよう。この議論への関心は、自由主義・民主主義を標榜する先進国による、民主化や人権の擁護を目的とした発展途上国に対する介入がしばしば起こっている現代の世界情勢も反映したものであろう。このトピックについては、ミルはさまざまところで言明を残しているほか、『自由論』が出版されたのと同じ1859年に発表された「不干渉論」(‘A Few Words on Non-Intervention’, CW XXI, 111-24)という²⁴⁾、ウォルツァーが取り上げたことによって政治学者の間でよく知られるようになった論考がある (Walzer 1977, 87-91 / 訳 194-201. Cf. Walzer 2007)。この論考でミルは、文明国による野蛮状態にある国に対する干渉や専制的統治を正当化するとともに、文明国間であっても一定の条件のもとで介入が正当化されることを主張していた。この興味深い論考について近年では、Varouxakis (1997) や Doyle (2013) が詳細な検討をくわえているほか、三宅 (2011) も取り上げている。

2. 帝国の思想史

このトピックについては枚挙にいとまがないが、ここでは Mehta (1999) 以降、近年の代表的な業績に触れておくことにしたい。

ピッツ (Pitts 2005) は18世紀後半から19世紀半ばまでの英仏における帝国と自由主義をめぐる思想史を扱い、そのなかの1章を割いてベンサムおよびミル父子の議論を検討している。ピッツは権威主義的なベンサム解釈を批判しながら、自由主義的ベンサム像を提示した上で、その議論を権威主義的な傾向のより強いミル父子の議論と対比させている。ピッツの考えでは、ベンサムにくらべてミル父子の議論が権威主義的であったのは、後者が進歩の観念をもっていたからであった。そして、国民性という概念、社会の発展段階論的枠組み、文明先進国による非文明国・

21) 古代アテネに関するミルとグロートの議論を比較した論文として、Demetriou (2013) が公刊されている。

22) たとえば、Armitage (2004; 2014), Bell (2006)。

23) Varouxakis and Kelly (2010, 17) によれば、1990年代以降にこの分野に関心が集まる以前には、ミルの国際思想を直接的に主題とした論考は Miller (1961) のみであった。

24) ただし、Varouxakis (2013, 6-8) が注意を促しているように、ふたつの論考の発表年が同じなのはほとんど偶然の結果であり、そこに何らかの意図や理論的関連を過剰に読み込むことには慎重でなければならない。

文明後進国に対する啓蒙専制的な支配の是認などに着目し、ミルに「帝国への転回」を見出している。このようなミルの文明観の問題については、帝国主義的思考との関連で検討した Jahn (2005) や、後述のレヴィンの著作もあり、近年ではよく論じられるトピックとなっている。

また、19 世紀から 20 世紀の国際思想について近年精力的に研究を進めている若手研究者の代表格であるベルがミルの植民地論を検討している (Bell 2010)。ベルはミルの植民地正当化論の変遷をたどるとともに、征服による植民地ではない移民による植民地についてのミルの議論に着目し、ミルの国際秩序観を単純な帝国主義的な枠組みとは異なった視点から論じている。

さらに、ミルの国際思想に関するもっとも重要な研究として、近年のミル研究を先導してきたヴァローカキスの最新の成果がまとめられている (Varouxakis 2013)。ミルの国際関係思想については、おそらくはこれまでまとまった研究がなかったこともあって、それへの言及が現代の状況に対する認識を直裁的に反映しがちであった。ヴァローカキスはこのようなアナクロニズムを批判しながら、国際法は法というよりは道徳であるとする (ジョン・オースティンからの影響を受けた) ミルの議論の考察のほか²⁵⁾、先に取り上げた「不干渉論」や関連する議論の読解、帝国主義や戦争と平和をめぐるミルの議論の検討などが、ヴィクトリア時代の社会的・政治的コンテクストの中でミルの思想を位置づける形でなされている²⁶⁾。本書については、Varouxakis (2002) と合わせて読むことが重要であろう。

ピッツも指摘しているように、ミルの国際思想を理解する鍵となるのは、文明の段階論的進歩という考え方である。この点に関する近年の成果として Levin (2004) があり、ミルが非文明国とみなしていたインドや中国に関する議論も取り上げながら、ミルの文明観を検討している。ミルの考えでは、インドが過去から現在にいたるまで野蛮な状態にとどまり続けていたのに対して、中国は過去には高い文明に到達していたにもかかわらず停滞に陥った国家であり、それゆえにヨーロッパにとって重要な教訓を示している国家であった。こうして、ミルはヨーロッパ諸国が「中国的停滞」に陥ることを強く危惧していた。

ミルの文明観と密接に関係するのが彼の歴史観である。サン・シモンやオーギュスト・コントといったフランス思想家やサミュエル・テイラー・コールリッジの歴史哲学からミルが大きな影響を受けていたことは、これまでも十分に検討されてきた。しかし、ミルにはまとまった歴史論がなかったこともあって、その歴史観はこれまで本格的な検討対象となつてこなかったが、近年では、ミルの歴史論から進歩の観念を読み解こうとした López (2012) のほか、川名 (2012) がミルの歴史論にこれまでの研究史以上に重要性を与える解釈を提示している。

25) Schofield (2013) は、ベンサム法の理論を視野に入れて、オースティンのミルに対する影響を論じている。

26) なお、Varouxakis (2009) では、ミルの国際政治思想が近年の研究状況と合わせて概観されている。

3. 帝国の内と外——インド・アイルランド・アメリカ——

(a) インド

ミルの著作におけるインドへの言及については『経済学原理』における比較土地制度論、『代議政治論』における植民地統治論などがよく知られており、研究史においてもしばしば関心が向けられてきた。しかし、ミルが東インド会社に同社の社員であった父の手引によって1823年に入社してから、インド大反乱の結果として会社が廃止される1858年まで、通信審査部所属の社員としてインド統治行政に関わっていたにもかかわらず、『自伝』などでこの経験についてほとんど触れていないこと、インド向け送達文書の起草という、いわば会社の公式見解に関わる業務であったために、そこにミル自身の見解をどの程度読みこむことができるか判断が難しかったことなどもあって、ミルのインド論は研究がなかなか進まない分野のひとつであった。

ミルのインド論についての先駆的研究は、歳入部門と司法部門を中心に功利主義者の議論を検討したStokes (1959)であり、日本語でも熊谷 (1981)、高島 (1987; 1988)といった研究がなされてきていたが、トロント大学版著作集第30巻 (刊行は1990年)にインド関係の論考が、送達文書のリストとともにまとめて収録されるなど資料の整備が進むなかで、新しい研究が現れてきた。なかでも、Zastoupil (1994)は送達文書を広範に利用して、インド統治の経験がミルの思想にどのような影響を与えていたかを検討した研究として異彩を放っている。

ザストウピルはミルのインド統治に関する見解を時系列に沿って検討しているが、その議論によれば、ミルは父ジェームズ・ミルの忠実な追従者として職歴を開始したが、1826年の「精神の危機」や1836年の父の死などによって、直接統治による急進的改革を主張していた父と違った見解をしめすようになり、インドの伝統を重視し間接統治を主張する行政官グループから大きな影響を受けるようになった。その後、1840年代から1850年代にミルは再び部分的に直接統治を支持するようになっていく。このようなミルのインド統治に関する見解の変遷は、彼の政治思想の発展と平行に進んでいるように見える点も多く、インド統治の経験が彼の政治思想の発展に影響を与えていた可能性は否定できないが、ザストウピルの議論はこの点に関する限り、論拠が十分であるように思われる。それでも、Zastoupil (1994)は、ミルとインドの関わりへの多様な側面を検討しているMoir, Peers, and Zastoupil, eds. (1999)と合わせて、このトピックに関する今後の研究の出発点となる著作である。

ミルのインド論については、上述の研究書の構成・章立てが示唆するように、『イギリス領インド史』の著者であり東インド会社社員でもあった父ジェームズ・ミルとのより詳細な比較研究が不可欠であるが、ジェームズ・ミル研究についてはいまだ道半ばの感が強い²⁷⁾。

27) ジェームズ・ミルの『イギリス領インド史』を取り上げたモノグラフとしてはMajeed (1992)があるが、研究の蓄積という点ではまだ不十分である。日本語では、安川 (1997; 1999)が重要である。

(b) アイルランド

アイルランドはイギリス帝国内でインドとならんでミルが多大な関心を向けた国であった。文明段階論的枠組みを用い、ヨーロッパ的進歩とアジア的停滞という二分法的思考にしばしば依拠していたミルにとって、アイルランドはイングランドによる抑圧的支配のもとで進歩が阻害され文明の恩恵を享受できずにいる国家であり、その状況の改善は強い関心の対象であった。いわゆるアイルランド問題(イングランドのアイルランドに対する抑圧政策に起因するさまざまな問題)へのミルの関心は 1826 年にアイルランドにおけるカトリック問題に関する論考を発表して以来、1868 年 2 月の『イングランドとアイルランド』の公刊や 3 月のアイルランドに関する議会演説まで 40 年以上にわたるものであった。とりわけ、1840 年代半ばの大飢饉に際して「アイルランドの状態」と題して発表された計 43 編の論考は多くの関心を集めてきた (Black 1960; Martin 1980; Zastoupil 1983; Bull 1996; Gray 1999; 村上 1999 など)。近年では、Kinzer (2001) が、土地問題だけでなく、ミルの生涯にわたるアイルランドに関する言明を包括的に取り上げて時系列にしたがって分析しており、ミルのアイルランド論としては現在まででもっとも包括的でバランスのとれた研究となっている²⁸⁾。

(c) アメリカ

ミルとアメリカ合衆国というトピックについては、とりわけトクヴィル『アメリカのデモクラシー』との関連で論じられることが多かったが、近年は国際思想の観点から、アメリカ南北戦争時のミルの論考が関心を集めるようになっており、先駆的な Waller (1962) のほか多くの研究が公刊されている (Park 1991; Schneider 2007; Compton 2008; Varouxakis 2013 など)。

また、南北戦争に関する議論は、奴隷問題や黒人問題と不可分であり、これらの問題をめぐるミルの議論の内実が明らかにされつつある。ミルは南北戦争時に奴隷制に反対する立場から北部支持を打ち出していたが、それ以外にも、トマス・カーライルが「黒人問題論」(‘Occasional Discourses on the Negro Question’) という人種差別的な論考を発表した際には反論を寄せ、1865 年にイギリス領ジャマイカで発生した黒人の反乱を弾圧した総督エアを本国で刑事訴追しようとする動きが高まった時にはその運動の中心となった。Schultz and Varouxakis, eds. (2005) に含まれている論考のうち、Goldberg (2005) および Miller (2005) は、それぞれカーライルとの論争とジャマイカ問題を取り上げて分析している。また、Kohn and O’Neill (2006) は、パークとミルに共通の知的源泉としてのスコットランド啓蒙の歴史観・文明観を指摘しつつ、両者の比較を通じて、イギリスによる帝国支配の擁護者としてのミルという単純な理解の是正をはかっている。

なお、これらの問題に対しては、日本では山下重一が早くから関心を向けており、重要な貢献をおこなっている。山下は南北戦争時にミルが発表した 2 篇の論考を翻訳するとともに (山下訳 1994)、ジャマイカ事件については山下 (1998) を、黒人問題をめぐるカーライルとの対立につ

28) なお、キンザーには、同書とは別に、これまでのミル政治思想に関する研究をまとめた Kinzer (2007) がある。

いては山下 (2005) を、それぞれ公刊している。

VII 宗 教 論

よく知られているように、ミルは「最初から、言葉の普通の意味での宗教的信条をまったくもつことなしに育てられた」が (*Autobiography*, CW I, 10), まったく宗教に関心をもつことがなかったわけではなかったし、コントの人類教 (*Religion de l'Humanité*) から影響をうけ、遺稿をまとめた『宗教三論』では、宗教の有用性という見地から、超越的神性を否定的にとらえた「人間性の宗教 (*Religion of Humanity*)」や、靈魂の不滅や来世への関心を示したいいわゆる「希望の神学 (あるいは宗教)」などのアイデアを提示している。しかし、ミルの宗教論は彼の思想を理解するために本質的な重要性をもっていると思なされるのが少なく、それゆえに本格的な考察の対象となってはこなかった。しかし、近年、レイダーやセルによってミルの宗教論を主題とした研究書が相次いで出版された (Raeder 2002; Sell 2004)。いずれも思想史的研究として『宗教三論』を分析しているが、とくにレイダーは、ベンサムおよびジェイムズ・ミルの影響の分析をはじめとして、ミルがこの宗教の構想を抱くに至った経緯を描き出すだけでなく、『自由論』や『功利主義』との関連も視野に入れることによって (不十分ながら、『ウィリアム・ハミルトン卿の哲学の検討』にも言及している)、ミルの思想における宗教論の含意をさぐっており、議論の細部には異論も多いが、この分野では現時点でもっとも広範な研究である。

日本でも、上述のように『宗教三論』の新訳が出版されるなど、このトピックには徐々にではあるが関心が向けられるようになっており、小泉仰の先駆的な研究に加えて (小泉 1988; 1992; 1997)、今世紀にはいつてからは田中 (2001)、船木 (2003)、長谷川 (2005; 2008)、有江 (2008) などが現れている。なかでも、有江 (2008) は、ミルが16歳の時に読んだ『人類の現世の幸福に対する自然宗教の影響の分析』との関係にまでさかのぼって検討しており²⁹⁾、日本語ではもっとも幅広くミルの宗教に関する見解を扱った研究となっている。研究史を批判的に踏まえたうえで有江は、ミルの『宗教三論』のエッセンスを「啓蒙の合理主義を堅持する社会学者、社会改良家、功利主義者ミルによる、人間の内発的な自己陶冶を考慮した新宗教の提案である」と総括している (有江 2008, 24)。

VIII 伝 記 的 研 究

伝記的研究は資料の整備によってもっとも恩恵を受け、期待される分野のひとつであろう。ミ

29) この著作は、ベンサムの草稿をグロートが編集して1822年にフィリップ・ビーチャム (Philip Beauchamp) という仮名で出版したものである。この著作の著者問題 (ベンサムの著作とみなすことができるか、あるいは編集の過程でグロートの考えが反映されてしまっているか) については、大久保 (1997) を参照のこと。

ルの場合には、『自伝』がその重要性にもかかわらず、しばしばミスリーディングな記述を含んでいるという難点もあって、広範な資料を活用し、これまでの研究の蓄積を踏まえた伝記的研究はいっそう重要なものとなるように思われる。

ミルの大部の伝記としては、ミルと親交のあったバインによるものや (Bain 1882)、当時ハイエクが精力的に調査していたミルの書簡も利用した Packe (1954) などが代表的なものであるが、トロント大学版著作集完結以降には Capaldi (2004) や Reeves (2007) が出版されている。このうち、カバルディの議論の特徴は、『自伝』をふくむミル自身の言明を好意的に受け取りつつ、ハリエット・テイラーの知的影響を強調し、それとともにロマン主義の影響を重視している点にある。ハリエットについては、自律の重要性に対するハリエットの一贯した姿勢がミルに与えた影響を指摘しながら、ミルに対するハリエットの(精神的なものにとどまらない)知的影響を指摘する、いわゆる「ハリエット・テイラーの神話」について、あらためて積極的な見解が打ち出されている³⁰⁾。また、ロマン主義思想の影響が強調されているが、そのこと自体は否定できないとしても、近年の古典的功利主義思想史研究の成果への配慮が十分とは言えないために、ミルがロマン主義思想を取り入れることによって相対化しようとしたベンサムやジェイムズ・ミルの思想に対する評価とのバランスを欠いてしまっているように思われる。

これらは現時点で検討されるに値する伝記的研究ではあるものの、いずれも決定的なものとは言い難く、たとえばモスナーのヒューム伝 (Mossner 2001) やロスのスミス伝 (Ross 2010) のような、質・量ともに高い水準の研究の公刊が今後の課題となるだろう。

IX 終 わ り に

トロント大学版著作集の刊行と軌を一にして進展した 20 世紀後半のミル研究は、単純化すれば、伝統的解釈から修正的解釈へという流れによって特徴づけられるだろう。伝統的解釈では、さまざまな形の「二人のミル」が指摘され——功利主義者ミルと自由主義者ミル、権威主義的ミルと自由主義的ミルなど——、その議論は解消しがたい矛盾を含む、体系的・一貫性のない折衷的で不十分なものとして批判され、「乗り越え」の対象となっていた。それに対して修正的解釈は、伝統的解釈を批判し、ミルの思想を緻密なテキスト読解に基づいて一貫性をもったものとして解釈し、彼の思想を矛盾ない堅固な理論として提示することを目指し、多大な成果を上げてきた。これらの研究がミルを「生気なき折衷」とみなす見解を過去のものにし、ミルの思想が現代社会においてもっている重要性を明らかにすることに貢献したことは間違いないだろう。

30) 「ハリエット・テイラーの神話」については、知的影響を強調する Hayek (1951) と、それに懐疑的な見解を提示した Pappé (1960) 以来、多くの議論がなされてきた (泉谷 1977)。なお、ハリエット・テイラーについては、論考が Jacobs (1998) としてまとめられているほか、伝記的研究として Jacobs (2002) がある。

現在のミル研究は、この修正的解釈から多くを学び、それに多大な貢献をしながら、さらに新しい段階に進みつつある。ミルの思想が一貫しているか矛盾しているかという、ともすれば不毛になりかねない問題設定自体は影をひそめ、もし矛盾に見える要素があるとしたら、それがミルの体系の中で、そしてミルが思索していた知的・歴史的コンテキストの中で、どのような位置づけや意義をもっていたかをさぐる研究が、これまで以上に盛んになっている。こうしてミル研究はますます多様化・複雑化し、このような研究の深化は、いくつかの重要なトピックについて、研究者の間での意見の一致を促進するよりも、その不一致を増幅させている感すらある。そして、その帰結として、ミルの人間・思想の「全体像」を描きだそうとする試みは（そのようなことがそもそも可能であったとしても）絶望的に難しくなっていくだろう。それでも、このような状況は思想家研究においてしばしば見られる「幸福」な状態であって、著作集完結という契機を、そして生誕200年という契機を経たミル研究がたどりついている状態であるように筆者には思われる。

(川名雄一郎：京都大学白眉センター)

文 献

- Armitage, D. 2004. The Fifty Years' Rift: Intellectual History and International Relations. *Modern Intellectual History* 1 (1): 97-109.
- . 2014. The International Turn in Intellectual History. In *Rethinking Modern European Intellectual History*, ed. by D. M. McMahon and S. Moyn. Oxford: Oxford University Press, 232-52.
- Bain, A. 1882. *John Stuart Mill: A Criticism with Personal Recollections*. London: Longmans, Green & Co. 山下重一・矢島杜夫訳『J・S・ミル評伝』御茶の水書房, 1993.
- Ball, T. 2000. The Formation of Character: Mill's "Ethology" Reconsidered. *Polity* 33:25-48.
- Baum, B. D. 2000. *Rereading Power and Freedom in J. S. Mill*. Toronto: University of Toronto Press.
- Bell, D. 2006. Empire and International Relations in Victorian Political Thought: Historiographical Essay. *Historical Journal* 49:281-98.
- . 2010. John Stuart Mill on Colonies. *Political Theory* 30:1-31.
- Berger, F. 1984. *Happiness, Justice and Freedom: Moral and Political Philosophy of John Stuart Mill*. Berkeley: University of California Press.
- Berlin, I. 1991. John Stuart Mill and the Ends of Life. In *J. S. Mill On Liberty in Focus*, ed. by J. Gray and G. W. Smith. London: Routledge, 31-61. 大久保正健訳「J・S・ミルと生活の諸目的」『ミル『自由論』再読』所収, 泉谷周三郎・大久保正健訳, 木鐸社, 2000, 29-68.
- Black, R. D. C. 1960. *Economic Thought and the Irish Question, 1817-1870*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brink, D. 1992. Mill's Deliberative Utilitarianism. *Philosophy and Public Affairs* 21:67-103.
- . 2013. *Mill's Progressive Principles*. Oxford: Oxford University Press.
- . 2014. Mill's Ambivalence about Duty. In *Mill on Justice*, ed. by L. Kahn. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 21-46.
- Brown, D. G. 1972. Mill on Liberty and Morality. *Philosophical Review* 81:133-58.
- . 1973 a. John Mill: John Rawls. *Dialogue* 12:1-3.
- . 1973 b. What is Mill's Principle of Utility? *Canadian Journal of Philosophy* 3:1-12.
- . 1974. Mill's Act-Utilitarianism. *Philosophical Quarterly* 24:67-68.
- . 1978. Mill on Harm to Others' Interests. *Political Studies* 25:395-99.

- Bull, P. 1996. *Land, Politics and Nationalism: A Study of the Irish Land Question*. New York: St. Martin's Press.
- Capaldi, N. 1973. Mill's Forgotten Science of Ethology. *Social Theory and Practice* 2:409–20.
- . 2004. *John Stuart Mill: A Biography*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Carlisle, J. 1991. *John Stuart Mill and the Writing of Character*. Athens, Georgia: University of Georgia Press.
- Claeys, G. 2013. *Mill and Paternalism*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Collini, S. 1980. Political Theory and the 'Science of Society' in Victorian Britain. *Historical Journal* 23:203–31.
- Collini, S., D. Winch, and J. W. Burrow. 1983. *That Noble Science of Politics: A Study in Nineteenth-Century Intellectual History*. Cambridge: Cambridge University Press. 永井義雄・坂本達哉・井上義郎訳『かの高貴なる政治の科学』ミネルヴァ書房, 2005.
- Compton, J. W. 2008. The Emancipation of the American Mind: J. S. Mill on the Civil War. *Review of Politics* 70:221–44.
- Cowling, M. 1963. *Mill and Liberalism*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Crimmins, J. E. 1996. Contending Interpretations of Bentham's Utilitarianism. *Canadian Journal of Political Science / Revue canadienne de science politique* 29:751–77.
- Crisp, R. 1997. *Mill on Utilitarianism*. London: Routledge.
- Demetriou, K. N. 2013. The Spirit of Athens: George Grote and John Stuart Mill on Classical Republicanism. In *John Stuart Mill: A British Socrates*, ed. by K. N. Demetriou and A. Loizides. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 176–206.
- Demetriou, K. N. and A. Loizides, eds. 2013. *John Stuart Mill: A British Socrates*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Devigne, R. 2006. *Reforming Liberalism: J. S. Mill's Use of Ancient, Religious, Liberal, and Romantic Moralities*. New Haven: Yale University Press.
- Dome, T. 1999. Bentham and J. S. Mill on Tax Reform. *Utilitas* 11 (3): 320–39.
- . 2004. *The Political Economy of Public Finance in Britain 1767–1873*. London: Routledge.
- Donner, W. 1991. *The Liberal Self: John Stuart Mill's Moral and Political Philosophy*. New York: Cornell University Press.
- Doyle, M. 2013. J. S. Mill on Nonintervention and Intervention. In *Just and Unjust Military Intervention: European Thinkers from Vitoria to Mill*, ed. by S. Recchia and J. Welsh. Cambridge: Cambridge University Press.
- Eggleston, B. and D. E. Miller, eds. 2014. *The Cambridge Companion to Utilitarianism*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Eggleston, B., D. Miller, and D. Weinstein, eds. 2011. *John Stuart Mill and the Art of Life*. Oxford: Oxford University Press.
- Goldberg, D. T. 2005. Liberalism's Limits: Carlyle and Mill on 'The Negro Question.' In *Utilitarianism and Empire*, ed. by B. Schultz and G. Varouxakis. Lanham: Lexington Books, 125–35.
- Gray, J. 1979. John Stuart Mill: Traditional and Revisionist Interpretations. *Literature of Liberty* 2 (2): 7–37.
- . 1983. *Mill on Liberty: A Defence*. London: Routledge.
- Gray, P. 1999. *Famine, Land and Politics: British Government and Irish Society, 1843–50*. Dublin: Irish Academic Press.
- Griffin, J. 1986. *Well-Being: It's Meaning, Measurement, and Moral Importance*. Oxford: Oxford University Press.
- Hamburger, J. 1999. *John Stuart Mill on Liberty and Control*. Princeton: Princeton University Press.
- Hayek, F. 1951. *John Stuart Mill and Harriet Taylor: Their Correspondence and Subsequent Marriage*. London: Routledge.
- Himmelfarb, G. 1974. *On Liberty and Liberalism: The Case of John Stuart Mill*. New York: Knopf.
- Hollander, S. 1985. *The Economics of John Stuart Mill*. 2 vols. Oxford: Basil Blackwell.
- . 2000. *John Stuart Mill on Economic Theory and Method: Collected Essays III*. London: Routledge.
- Inoue, T., ed. 2014. *J. S. Mill's Journal and Notebook of a Year in France, May 1820–July 1821: A Complete Edition with A Facsimile Reprint of the Rediscovered Notebook of John Stuart Mill in Kwansai Gakuin University and Transcribed Text, Annotation and Comparative Studies*. Tokyo: Edition Synapse.
- Jacobs, J. E. 2002. *The Voice of Harriet Taylor Mill*. Bloomington: Indiana University Press.

- , ed. 1998. *The Complete Works of Harriet Taylor Mill*. Bloomington: Indiana University Press.
- Jahn, B. 2005. Barbarian Thoughts: Imperialism in the Philosophy of John Stuart Mill. *Review of International Studies* 31:599–618.
- Justman, S. 1991. *The Hidden Text of Mill's Liberty*. Lanham: Rowman & Littlefield.
- Kahn, L., ed. 2012. *Mill on Justice*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Kelly, P. 1987. The Influence of Bentham on the Thought of J. S. Mill: A Critical Review. *Bentham Newsletter* 11:53–57.
- . 2001. Classical Utilitarianism and the Concept of Freedom: A Response to the Republican Critique. *Journal of Political Ideologies* 6 (1): 13–31.
- Kinzer, B. 2001. *England's Disgrace?: J. S. Mill and the Irish Question*. Toronto: University Toronto Press.
- . 2007. *J. S. Mill Revisited: Biographical and Political Explorations*. New York: Palgrave Macmillan.
- Kohn, M. and D. I. O'Neill. 2006. A Tale of Two Indies: Burke and Mill on Empire and Slavery in the West Indies and America. *Political Theory* 34 (2):192–228.
- Kubitz, O. A. 1932. *Development of John Stuart Mill's System of Logic*. Urbana: The University of Illinois.
- Levin, M. 2004. *J. S. Mill on Civilization and Barbarism*. London: Routledge.
- Loizides, A. 2013. *John Stuart Mill's Platonic Heritage: Happiness through Character*. Lanham: Lexington Books.
- , ed. 2014. *Mill's A System of Logic*. New York: Routledge.
- López, R. 2012. John Stuart Mill's Idea of History: A Rhetoric of Progress. *Res Publica: Revista de Filosofía Política* 27:63–74.
- Lyons, D. 1965. *Forms and Limits of Utilitarianism*. Oxford: Oxford University Press.
- . 1973. *In the Interest of the Governed*. Oxford: Oxford University Press.
- . 1976. J. S. Mill's Theory of Morality. *Nous* 10:101–19.
- . 1994. *Rights, Welfare and Mill's Moral Theory*. Oxford: Oxford University Press.
- Majeed, J. 1992. *Ungoverned Imaginings: James Mill's The History of British India and Orientalism*. Oxford: Oxford University Press.
- Martin, D. E. 1981. *John Stuart Mill and the Land Question*. Hull: University of Hull Press.
- Mehta, U. S. 1999. *Liberalism and Empire: A Study in Nineteenth-Century British Liberal Thought*. Chicago: University of Chicago Press.
- Miller, D. E. 2000. John Stuart Mill's Civic Liberalism. *History of Political Thought* 21:88–113.
- . 2010. *J. S. Mill: Moral, Social and Political Thought*. London: Polity.
- Miller, J. J. 2005. Chairing the Jamaica Committee: J. S. Mill and the Limits of Colonial Authority. In *Utilitarianism and Empire*, ed. by B. Schultz and G. Varouxakis. Lanham: Lexington Books, 155–78.
- Miller, K. E. 1961. John Stuart Mill's Theory of International Relations. *Journal of the History of Ideas* 22:493–514.
- Moir, M., D. Peers, and L. Zastoupil, eds. 1999. *J. S. Mill's Encounter with India*. Toronto: University of Toronto Press.
- Mossner, E. C. 2001. *The Life of David Hume*, 2nd ed. Oxford: Clarendon Press.
- Nozick, R. 1974. *Anarchy, State, and Utopia*. New York: Basic Books. 嶋津格訳『アナーキー・国家・ユートピア—国家の正当性とその限界』木鐸社, 1995.
- Nussbaum, M. C. 2004. Mill between Aristotle & Bentham. *Daedalus* 133 (2): 60–68.
- Packe, M. St. J. 1954. *The Life of John Stuart Mill*. London: Secker & Warburg.
- Pappé, H. O. 1960. *John Stuart Mill and the Harriet Taylor Myth*. Melbourne: Melbourne University Press.
- Parfit, D. 1984. *Reasons and Persons*. Oxford: Oxford University Press. 森村進訳『理由と人格—非人格性の倫理へ』頸草書房, 1998.
- Park, T. P. 1991. John Stuart Mill, Thomas Carlyle, and the U. S. Civil War. *Historian* 54:93–106.
- Petit, P. 1997. *Republicanism: A Theory of Freedom and Government*. Oxford: Oxford University Press.
- Pitts, J. 2005. *A Turn to Empire: The Rise of Imperial Liberalism in Britain and France*. Princeton: Princeton University Press.

- Plamenatz, J. 1958. *The English Utilitarians*, 2nd rev. ed. Oxford: Oxford University Press. 堀田彰他訳『イギリスの功利主義者たち—イギリス社会・政治・道徳思想史』福村出版, 1974.
- Priestley, F. E. L. and J. Robson, eds. 1963–1991. *Collected Works of John Stuart Mill*. 33 vols. Toronto: University of Toronto Press and London: Routledge. [CW と略記]
- Raeder, L. C. 2002. *John Stuart Mill and the Religion of Humanity*. Missouri: University of Missouri Press.
- Rees, J. C. 1956. *Mill and His Early Critics*. Leicester: University College of Leicester.
- . 1958. A Phase in the Development of Mill's Ideas on Liberty. *Political Studies* 6:33–44.
- . 1960. A Re-Reading of Mill on Liberty. *Political Studies* 8:113–29.
- . 1966. Was Mill for Liberty? *Political Studies* 14:72–77.
- . 1977. The Thesis of the 'Two Mills.' *Political Studies* 25:369–82.
- Reeves, R. 2007. *John Stuart Mill: Victorian Firebrand*. London: Atlantic Books.
- Riley, J. 1998. *Mill on Liberty* London: Routledge.
- . 2007. Mill's Neo-Athenian Model of Liberal Democracy. In *J. S. Mill's Political Thought: A Bicentennial Reassessment*, ed. by N. Urbinati and A. Zakaras. Cambridge: Cambridge University Press, 221–49.
- Robson, J. 1967. Principles and Methods in the Collected Edition of John Stuart Mill. In *Editing Nineteenth Century Texts*, ed. by J. Robson. Toronto: University of Toronto Press.
- . 1968. *The Improvement of Mankind: The Social and Political Thought of John Stuart Mill*. Toronto: University of Toronto Press.
- . 1981. A Mill for Editing. *Browning Institute Studies* 9:1–13.
- Rosen, F. 2012. *Mill*. Oxford: Oxford University Press.
- Ross, I. S. 2010. *The Life of Adam Smith*, 2nd ed. Oxford: Oxford University Press.
- Ryan, A. 1964. Mr. McCloskey on Mill's Liberalism. *Philosophical Quarterly* 14:253–60.
- . 1970. *The Philosophy of John Stuart Mill*. London: Macmillan.
- . 1974. *John Stuart Mill*. London: Routledge, Kegan, and Paul.
- . 2014. A System of Logic and the 'Art of Life.' In *Mill's A System of Logic*, ed. by A. Loizides. New York: Routledge, 246–61.
- Scarre, G. 1989. *Logic and Reality in the Philosophy of John Stuart Mill*. Dordrecht: Kluwer.
- Schneider, T. 2007. J. S. Mill and Fitzjames Stephen on the American Civil War. *History of Political Thought* 28:290–304.
- Schofield, P. 2013. John Stuart Mill on John Austin (and Jeremy Bentham). In *The Legacy of John Austin's Jurisprudence*, ed. by M. Freeman and P. Mindus. Dordrecht: Springer-Verlag, 237–54.
- Schultz, B. and G. Varouxakis, eds. 2005. *Utilitarianism and Empire*. Lanham, MD: Lexington Books.
- Sell, A. P. F. 2004. Mill on God: *The Pervasiveness and Elusiveness of Mill's Religious Thought*. Aldershot: Ashgate.
- Semmel, B. 1984. *John Stuart Mill and the Pursuit of Virtue*. New Haven: Yale University Press.
- Shaw, W. H. 2014. Rights, Justice, and Rules and in Mill's Utilitarianism. In *Mill on Justice*, ed. by L. Kahn. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 47–69.
- Skinner, Q. 1997. *Liberty before Liberalism*. Cambridge: Cambridge University Press. 梅津順一訳『自由主義に先立つ自由』聖学院大学出版会, 2001.
- . 2002. A Third Concept of Liberty. *Proceedings of the British Academy* 117:237–68.
- Skorupski, J. 1989. *John Stuart Mill*. London: Routledge.
- . 2006. *Why Read Mill Today?* London: Routledge.
- , ed. 1998. *The Cambridge Companion to Mill*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Snyder, L. 2006. *Reforming Philosophy: A Victorian Debate on Science and Society*. Chicago: University of Chicago Press.
- Stokes, E. 1959. *The English Utilitarians and India*. Oxford: Oxford University Press.

- Su, H. 2013. *Economic Justice and Liberty: The Social Philosophy in John Stuart Mill's Utilitarianism*. New York: Routledge.
- Sumner, L. W. 1996. *Welfare, Happiness, and Ethics*. Oxford: Oxford University Press.
- Ten, C. L. 1991. Mill's Defence of Liberty. In *J. S. Mill on Liberty in Focus*, ed. by J. Gray and G. W. Smith. London: Routledge.
- , ed. 2010. *Mill's On Liberty: A Critical Guide*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Thompson, D. F. 1976. *John Stuart Mill and Representative Government*. Princeton: Princeton University Press.
- Urbinati, N. 2002. *Mill on Democracy: From the Athenian Polis to Representative Government*. Chicago: University of Chicago Press.
- Urbinati, N. and A. Zakaras, eds. 2007. *J. S. Mill's Political Thought: A Bicentennial Reassessment*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Urmsom, J. O. 1953. The Interpretation of the Moral Philosophy of J. S. Mill. *Philosophical Quarterly* 3:33-39.
- Varouxakis, G. 1997. John Stuart Mill on Intervention and Non-intervention. *Millennium: Journal of International Studies* 26:57-76.
- , 2002. *Mill on Nationality*. London: Routledge.
- , 2009. The International Political Thought of John Stuart Mill. In *British International Thinkers from Hobbes to Namier*, ed. by I. Hall and L. Hill. New York: Palgrave Macmillan, 117-36.
- , 2013. *Liberty Abroad: J. S. Mill on International Relations*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Varouxakis, G. and P. Kelly, eds. 2010. *John Stuart Mill, Thought and Influence: The Saint of Rationalism*. London: Routledge.
- Waller, J. O. 1962. John Stuart Mill and the American Civil War. *Bulletin of the New York Public Library* 66:505-18.
- Walzer, M. 1977. *Just and Unjust Wars: A Moral Argument with Historical Illustrations*. New York: Basic Books. 萩原能久監訳『正しい戦争と不正な戦争』風行社, 2008. (翻訳の底本は2006年の第4版)
- , 2007. Mill's "A Few Words on Non-Intervention": A Commentary. In *J. S. Mill's Political Thought: A Bicentennial Reassessment*, ed. by N. Urbinati and A. Zakaras. Cambridge: Cambridge University Press, 347-56.
- West, H. 2004. *An Introduction to Mill's Utilitarian Ethics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- , 2014. Mill and Utilitarianism in the Mid Nineteenth Century. In *The Cambridge Companion to Utilitarianism*, ed. by B. Eggleston and D. E. Miller. Cambridge: Cambridge University Press, 61-80.
- Zastoupil, L. 1983. Moral Government: J. S. Mill on Ireland. *Historical Journal* 26:707-17.
- , 1994. *John Stuart Mill and India*. Stanford: Stanford University Press.
- 有江大介. 2008. 「J・S・ミルの宗教論—自然・人類教・“希望の宗教”」『横浜国際社会科学研究』12:676-708.
- , 編. 2013. 『ヴィクトリア時代の思潮とJ・S・ミル—文芸・宗教・倫理・経済』三和書籍.
- 安藤 馨. 2007. 『統治と功利—功利主義リベラリズムの擁護』勁草書房.
- 泉谷周三郎. 1977. 「J・S・ミルの思想と『ハリエット・テイラーの神話』」『横浜国立大学人文紀要第一類 哲学・社会科学』23:46-65.
- 内井惣七. 1988. 『自由の法則・利害の論理』ミネルヴァ書房.
- 大久保正健. 1997. 「『自然宗教が人類の地上の幸福に及ぼす影響の分析』の著者問題について」『杉野女子大学・杉野女子大学短期大学部紀要』34:21-33.
- 岡本慎平. 2011. 「推論と規範—J・S・ミル『論理学的体系』における生の技芸とその構造について」『哲学』(広島大学) 63:73-87.
- 小沢佳史. 2013. 「停止状態に関するJ・S・ミルの展望—アソシエーション論の変遷と理想的な停止状態の実現過程」『季刊経済理論』49(4): 78-87.
- , 2014a. 「J・S・ミルの保護貿易政策論—一時的な保護関税をめぐって」『マルサス学会年報』23:57-86.

- . 2014b. 「J・S・ミルの歳出論—19世紀ブリテンの軍事費を巡って」 TERG Discussion Papers (東北大学) 316.
- 小田川大典. 2003. 「J・S・ミルにおけるリベラリズムと共和主義」『政治思想研究』3:29-45.
- . 2014. 「ジョン・スチュアート・ミル—功利主義と代議制」『近代の変容(岩波講座政治哲学 第3巻)』所収, 宇野重規編, 岩波書店, 25-47.
- 川名雄一郎. 2006. 「ジョン・オースティンの功利主義論とJ・S・ミル」『イギリス哲学研究』29:103-18.
- . 2012. 『社会体の生理学—J・S・ミルと商業社会の科学』京都大学学術出版会.
- 熊谷次郎. 1981. 「J・S・ミルのインド・アイルランド論—その文明観・後進国観との関連で」『経済経営論集』23:189-232.
- ケリー, ポール. 1999. 「功利主義」『政治概念のコンテクスト』所収, 佐藤正志・添谷育志編, 早稲田大学出版部, 70-115.
- 小泉 仰. 1988. 『ミルの世界』講談社.
- . 1992. 「神の存在証明論批判の検討」『ミル研究』所収, 杉原四郎他編, 御茶の水書房, 203-21.
- . 1997. 『J・S・ミル』研究社.
- 児玉 聡. 2010. 『功利と直観—英米倫理想史入門』勁草書房.
- 佐々木憲介. 2001. 『経済学方法論の形成—理論と現実との相剋』北海道大学図書刊行会.
- . 2010. 「J・S・ミルと歴史学派」『経済学研究』(北海道大学) 60(3): 15-27.
- . 2013. 『イギリス歴史学派と経済学方法論争』北海道大学出版会.
- 下條慎一. 2013. 『J・S・ミルの市民論』中央大学出版部.
- 杉原四郎. 2003. 『杉原四郎著作集II 自由と進歩—J・S・ミル研究』藤原書店.
- 杉原四郎・福原行三. 1973. 「J・ミルおよびJ・S・ミル」『経済学史学会年報』11:1-10.
- 高島和哉・小畑俊太郎・板井広明. 2014. 「ベンサム研究の現在」『イギリス哲学研究』37:155-59.
- 高島光郎. 1987. 「東インド会社のJ・S・ミル—ミルのインド向け送達文書をめぐって」『エコノミア』94:70-81.
- . 1988. 「J・S・ミルとインド原住民教育—東インド会社勤務の一齣」『エコノミア』99:7-24.
- 田中秀子. 2001. 「J・S・ミルの功利主義と宗教思想」『人間社会研究科紀要』(日本女子大学) 7:37-51.
- 堂目卓生. 1999. 「ベンサム, ミルと税制改革」『経済政策思想史』所収, 西沢保・服部正治・栗田啓子編, 有斐閣: 81-97.
- 長谷川悦宏. 2005. 「人類教の二つの解釈」『社会思想史研究』29:105-120.
- . 2008. 「J・S・ミルの宗教思想—希望の神学は人間性の宗教に何を付け加えたのか」『文学部紀要』(法政大学) 57:21-30.
- 藤本正富. 1995. 「J・S・ミル相互需要説をめぐる諸問題—W・ソーントンとW・ヒューウェルの影響」『経済学史学会年報』33:65-78.
- . 1997. 「J・S・ミル相互需要説の先行者—R・トレنز, M・ロングフィールドおよびJ・パニントン」『経済学史学会年報』35:59-71.
- . 2001. 「J・S・ミル『経済学原理』第3版「国際価値論」新節の意味するもの」『大阪学院大学経済論集』15(1): 69-90.
- . 2005. 「ジェイムズ・ミルの相互需要説—J・S・ミルへの直接的理論継承を中心として」『大阪学院大学経済論集』19(2): 309-25.
- 船木恵子. 2003. 「J・S・ミルにおける認識論と宗教の関係」『経済学史学会年報』44:59-74.
- 松井名津. 2005. 「ジョン・スチュアート・ミル」『経済学の古典的世界1』所収, 鈴木信雄編, 日本経済評論社, 333-82.
- . 2010. 「J・S・ミル経済学方法論における帰納的性格」『イギリス経済学における方法論の展開—演繹法

- と帰納法』所収, 只腰親和・佐々木憲介編, 昭和堂, 130-61.
- 松嶋敦茂. 2005.『功利主義は生き残るか—経済倫理学の構築に向けて』勁草書房.
- 馬渡尚憲. 1987.「J・S・ミル研究」『経済学史学会年報』25:2-13.
- . 1997.『J・S・ミルの経済学』御茶の水書房.
- . 2001.「J・S・ミル研究の今後」『経済学史学会年報』39:42-49.
- 水野俊誠. 2014.『J・S・ミルの幸福論—快樂主義の可能性』梓出版社.
- 三宅麻理. 2011.「J・S・ミルにおける内政不干渉原則の再検討」『デモクラシーとナショナリズム—アジアと欧米』所収, 加藤節編, 未來社.
- 村上智章. 1999.「アイルランド・ジャガイモ飢饉とJ・S・ミル」『広島法学』22(4): 93-115.
- 諸泉俊介. 1997a.「古典派外国貿易論におけるトレンズとミル」『佐賀大学経済論集』30:167-90.
- . 1997b.「古典派外国貿易論におけるリカードウ・J.ミルとJ.S.ミル: いわゆる「ぬれぎぬ」問題を手がかりとして」『長崎県立大学論集』30:293-316.
- . 2003.「J・S・ミル『経済学原理』における分配・交換峻別論について」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』8:67-79.
- . 2014.「J・S・ミルの機械論—ベルグ=ブラウグ論争に寄せて」『佐賀大学全学教育機構紀要』2:15-42.
- 矢島杜夫. 1993.『ミル『論理学体系』の形成』木鐸社.
- 柳田芳伸・近藤真司・諸泉俊介編. 2013.『マルサス・ミル・マーシャル—人間と富との経済思想』昭和堂.
- 安川隆司. 1997.「ジェイムズ・ミル『英領インド史』再考—『文明の階梯』と『法の相対的優良性』」『東京経大会誌』203:65-88.
- . 1999.「ミル父子と植民地」『経済政策思想史』所収, 西澤保他編著, 有斐閣.
- 山下重一. 1998.『J・S・ミルとジャマイカ事件』御茶の水書房.
- . 2005.「カーライルとミルの黒人問題論」『国学院法学』42(4): 165-207.
- 山本圭一郎. 2012.「J・S・ミルの倫理学における二つの方法」『倫理学研究』42:100-11.
- 山本圭一郎・川名雄一郎. 2006.「ミル研究の現在」『イギリス哲学研究』26:126-34.

J・S・ミルの著作の翻訳

- 大久保正健訳. 2011.『宗教をめぐる三つのエッセイ』勁草書房. 2011.
- 斉藤悦則訳. 2012.『自由論』光文社.
- 山岡洋一訳. 2011.『自由論』日経BP社.
- 山岡洋一訳. 2006.『自由論』光文社.
- 竹内一誠訳. 2011.『大学教育について』岩波書店.
- 山下重一訳. 2003.『評註ミル自伝』御茶の水書房.
- 川名雄一郎・山本圭一郎訳. 2010.『功利主義論集』京都大学学術出版会.
- 村井章子訳. 2008.『ミル自伝』みすず書房.
- 山下重一訳. 1994.「アメリカの抗争・奴隷制権力(1862年)」『国学院法学』32(1): 47-85.